

## 第100回 「さんか・さろん」まとめ

日時:2020年11月17日(火)

テーマ:「～静岡県掛川市発～あるもの・ないものを認め、生かし合う地域交流」

スピーカー:掛川市から/長谷川八重さん(スローライフ掛川)、井村征司さん(ローカルライフスタイル研究会代表)、山崎善久さん(ローカルライフスタイル研究会・スローライフ掛川副代表)佐藤雄一さん(コンセプト(株)代表取締役)。その他から/小松正明さん(元掛川市助役、札幌)、松本浩司さん(旭川公園ゲストハウス主宰、旭川)、坂野真帆さん((株)そふと研究室代表、静岡)

冒頭、NPO スローライフ・ジャパン川島理事長から。「静岡県掛川市は2002年、スローライフを初めて市町村で取り組んだ地。スローライフの聖地でありメッカだ。当時の榛村純一さんは生涯学習の最後のステージとしてスローライフを据えた。私、榛村さん、ジャーナリストの筑紫哲也さん(当時、当NPO理事)は早稲田大学の一年違いの卒業生。そんなきっかけから掛川で一カ月に及ぶ催し、「スローライフ月間」を開催することとなる。掛川思想には、生涯学習・報徳・スローライフの3つがある」このようにスローライフ運動の出発ともなった思い入れの強い掛川です。これまで、そして今がどんな状態なのかを深くうかがいました。進行はNPO スローライフ・ジャパンの理事でもある長谷川八重さんです。※写真は2002年当時の左から川島さん、筑紫さん、榛村さん。



### 【掛川市のスローライフの歩み】

<長谷川>掛川市は、南は太平洋、北は南アルプスを背負う、人口12万人のまち。東京と京都のほぼ真ん中で、昔から人や物の往来があり交通の要所だった。基幹産業はお茶。里山の景色が広がり、人はのんびりとした気質。

榛村純一さんは名物市長。特に1979年に行った「生涯学習都市宣言」が知られる。ここでは高度経済成長のなか、むらで育った若者が立身出世で田舎を離れる“向都離村”に対し、この地に残り暮らそうとする者を“選択的定住民”とした。暮らす豊かさや生涯にわたって学ぶ幸せを味わえるまちづくりの、提唱と実践の宣言だった。

都会からの玄関口として在来線だけでなく新幹線駅が必要だと、長年にわたり市民に説き、一軒10万円の寄付を集め掛川新幹線駅の開業に漕ぎつけた。寄付が多く集まった背景には古くからこの地に報徳思想があったから。駅には二宮尊徳像が設置されている。駅の開業で企業誘致には成功したが、もう一つの祈願だった大学誘致は叶わなかった。

そこで、1995年、市は成人向けの単位制生涯学習システム「とはなにか学舎」を開校。市内にある企業や施設や人を教材に、“〇〇とは何か”を考え、物事の本質まで2年間かけて学ぶ。狙いはまちづくりのり

ーダーを育てる事にあった。私は98年入学し、コーディネーターを務める野口智子さん（現スローライフ・ジャパン事務局）と出会い、卒業後が本番だとサポート役に就かせていただき市民活動も始めた。

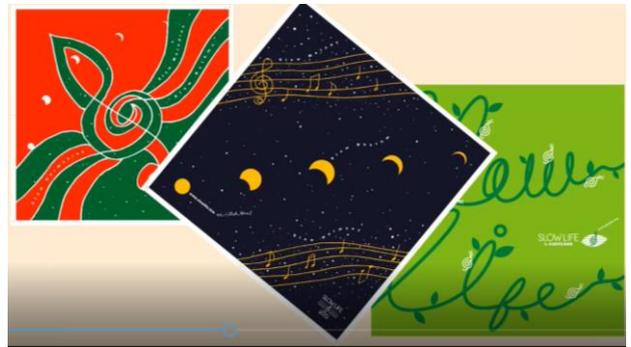
そして、2002年11月の「スローライフ月間 in 掛川」へと突入していく。当時は「スローライフ」が新しい言葉だったので「ファストフード」を対比にしてスローライフを理解しようと動き始めた。準備期間中に「とはなにか学舎」の卒業生らが中心となり、何度も話あい、理解を深めようとするなかで、生涯学習の帰結と捉え、これからの社会に必要な考えであり運動だ！と盛り上がり、「市民エントリーイベント」などへと繋がった。筑紫哲也さんには何度も来訪して頂き、楽しい時間を過ごした。月間のイベントは113種、132本を展開した。



市は身近な生活の中から「8つのスローライフ」を提案した。①スローペース（歩行文化）②スローフード（食・食育）③スローハウス・スローウエア（住まい方）④スローインダストリー（農業・林業）⑤スローエディケーション（大器晩成の教育・学習）⑥スローエイジング（美しく老いる）⑦スローマイウェイ・スローシンキング（趣味道楽・自己実現）…など7つの項目を自

らの暮らしに反映していこうとする◎スローライフ。これが指針となった。月間中はテレビ等の取材も多かった。特に筑紫哲也さんが自分の番組「NEW23」で取り上げた反響は大きかった。視察も多く評価も受けて、自分達のやってきた事への自負も芽生えた。

翌年の2003年には市民から再現の声が上がった。官民協働で開催した2002年に対して予算が付かないなかで実行委員会を組織して開催した。特に市民エントリーには、3000円のオリジナルバンダナを販売し事業資金とした。



このあと、代表の井村征司さんより補足。<井村>私も「とはなにか学舎」の卒業生。「スローライフ掛川」の代表を経て、今は「ローカルライフスタイル研究会」代表をしている。2002年にこれだけ大きなイベントが出来たのは市民の力が大きかった。「掛川おかみさん会」や商店街の組織もあったが、主には3つの柱があった。1つは「とはなにか学舎」、多くの講師陣の力を借りて約300人の卒業生が育っていた。2つめは1999年から2000年へ、21世紀へのカウントダウンとして市民が実行委員会を作り官民協働のやり方で提灯行列を行った実績があった。3つめは「月間」のなかで30日間毎日の「スローライフスクール」を7人位でやり切った。

＜長谷川＞その後のスローライフの歩みを追っていくと・・・。

2004年、市は掛川市市制50周年を機に「スローライフシティ宣言」を行ったが、2005年には周辺市町との合併があり新掛川市が誕生した。市長が交代しスローライフシティは受け継がれなかった。私達は気概も持ってスローライフの提唱を続けていこうと「NPO法人スローライフ掛川」を設立し団結した。設立記念には掛川城下の水辺を手入れし、国産の線香花火を取り寄せて参加型の花火大会を開催した。地元のミュージシャンによるライブなどスローな要素に拘り、規模を誇らないスローな時間と空間を提供できた。

NPO団体の活動は、スロースタイルサイクリング／ロケーション支援／調査研究事業／協働事業／廃校跡地活用／地域SNS事業受託／文化財指定管理／出版事業／視察取材対応／大学ゼミ合宿受け入れ…など多岐にわたったが、なかでも来訪者への受け入れが自分達を成長させたと思う。メンバーにはそれぞれの個性や得意分野があり、それらを来訪者の目的に合わせその都度組み合わせるなかで、自らの言葉で掛川を語り、訓練されていった。

2004年、2005年も「スローライフ月間」を開催したが、2006年にはひと月間のイベントではなく一年間を通して、ライフスタ

イルとしてスローライフを提唱しようと通年型の「掛川ライフスタイルデザインカレッジ」の開校へ踏み切った。カレッジの校訓は「知識を知恵に、そして行動に」。3つの柱は「まちの新しい使い方・足るを知る心・美しい毎日の創造」。榛村さんの提唱するスローライフはなるほど！と納得がいく教えだったが、当時30代・40代の私達は、もっと生活を楽しみ地域を素材に遊びながら新しい切り口でスローライフを提唱・実践していきたいと考えていた。



その為には大変な労力が必要だが、通年型の講座をやろうと頑張った。基礎知識を学ぶ座学と組み合わせて、アクティビティプログラムには、カヤック、トレッキング、フライフィッシング、オーガニックファーマーミング、サイクリング、ダッチオーブンクッキング、茶と器学、等があり、記憶に残る多くの体験を提供できた。私も大井川の源流でイワナを釣り上げた。カレッジは2010年まで毎年100名近くの受講者だった。多くの講師陣や県外からの参加者との交流を通し、掛川らしい価値観や掛川の豊かな暮らし方を再確認する機会が多くなった。また、これらの元には生涯学習があり、さらには報徳思想が我が町の底流にある事も改めて認識を深めた。

2006年4月

通年型 掛川ライフスタイルデザインカレッジ 開校  
(NPOスローライフ掛川 主催)

KAKEGAWA  
Lifestyle Design  
COLLEGE

掛川  
ライフスタイル  
デザインカレッジ

2009年には、掛川里山栗焼酎プロジェクトが発足し、その後2013年には掛川市だけに留まらず、同じような他地域の流儀を交換しあうような緩やかなつながりで「ローカルライフスタイル研究会」を発足した。発起人7名 賛同人9名、北海道・長崎・京都などと繋がっている。この研究会は、地域の個性的な暮らしぶりや生活の流儀（ローカルライフスタイル）を調査・研究し、新たな次元で活用・応用を提案することにより、豊かで潤いのある地域生活の実現に寄与することを目的とする。

では、活動の一つ、栗焼酎の紹介を。

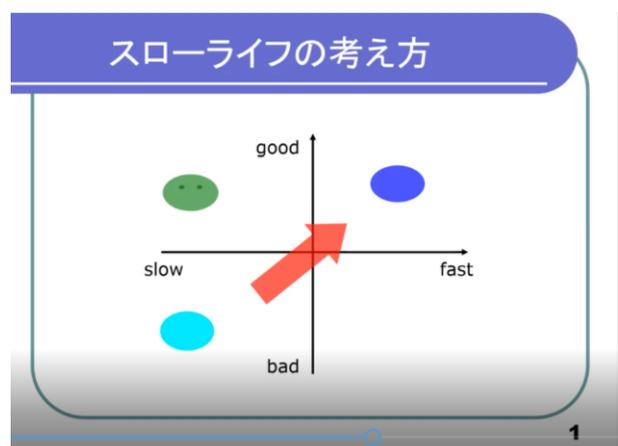


<山崎>栗焼酎プロジェクトのリーダーをしている。掛川里山栗焼酎は作り始めて12年目になる。掛川市は年間100トンの栗を出荷する産地。里山保全の意味からも、お茶以外で地域の特産品を作りたいと始めたのがこのプロジェクト。和菓子など栗の加工品のアイデアはあったが、酒を造る事で食との組み合わせや人の交流の場をつくれと思い、栗焼酎に挑戦した。

観光栗農園を貸し切った形でやっているため、栗園の整備もする。夏の暑い盛りに20名ほどで下草刈り。これには東京や北海道、または若い女性などが面白がって参加している。次に栗拾いは観光客に影響のな

い平日の早朝6時から1時間位、出勤前の栗拾い。次に大量の栗の鬼皮を剥く作業。初めの頃は手で剥いたが今は機械が主。最後の仕上げは人の手が加わる。そして酒蔵へ納品。11月下旬にはおよそ1000本の栗焼酎になってくる。毎年お披露目会もしているが、今年は異常気象で栗が収穫できず断念した。こうして商品を作ってモノや人の交流が生まれている。

<長谷川>当時の掛川市助役の小松さん。  
 <小松>私は2002年4月1日、国土交通省から掛川市へ助役として赴任した。8期目の市長からのミッションは「スローライフをやってくれ」だった。とは言え、榛村市長自身も「スローライフって何？」と掴みきれていなかったもので、2人で深夜遅くまで話し合っていた記憶がある。マトリクスを使って説明する、「早いと遅い」「良いとダメ」を座標軸に。日本は遅くてダメなものを早くて良いものに進歩させてきたが、決して早いことイコール良いだけではなく、ゆっくりが良いことは世の中にたくさんある。そのことに気づきましょう！というアプローチになる。さらに二次元では図れないものもある。当時、筑紫さんはそれを“緩急自在”と表現した。

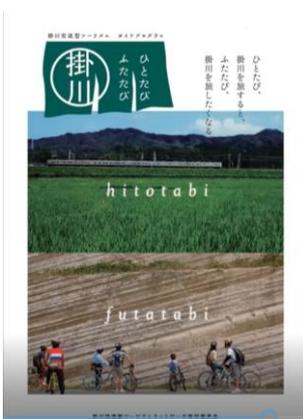


## 【あるもの・ないものを認め、生かし合う】

＜長谷川＞「あるもの・ないものを認め、生かし合う地域間交流」を佐藤さんから。

＜佐藤＞スローライフで繋がった各地のローカルライフスタイルが気になるようになる。また栗焼酎が各地のこれと合うんだよ！というような事も。京丹後から始まった「互産互消」の動きだが、そこに行きつくまでには「交流型ツーリズム」の考え方があった。互産互生機構の理事でもある坂野さんからご紹介を。

＜坂野＞「交流型ツーリズム」は2011年から2015年、文化庁の補助事業として掛川市が主体となり、スローライフで活躍したメンバーらがこぞって参加した取り組み。「掛川交流型ツーリズム推進宣言」を読み上げると・・・『生涯学習、スローライフ、報徳など“目に見えない地域生活の背景にある思いや考え方”を、個性ある掛川の宝と捉えます。/風土に根差し、醸成されたあらゆる産業や活動、暮らし方そのものを、地域文化資源と位置づけます。/地域文化資源を、暮らす人が誇りに思い・語り・伝えることで魅力を高め、訪れる人へさらなる関心、愛着を呼びおこします。/「もっと知りたい・語り合いたい」という暮らす人・訪れる人の交流を通じて、掛川は“繰り返し訪れたいまち”になります。』



目に見えないものの体現化し、曖昧なものを言葉にして思いを乗せて人に伝え、商品化する。ガイドブック『ひとたび ふたたび』のキャッチ

フレーズには思いが凝縮している。これまでスローライフでやってきたことや、既存の観光ポイントに更に思いがある人がガイドをしたり、脈々とやってきた「茶草場農法」が世界農業遺産に登録されて商品化したり。一時受付で販売も。そうした情報集約を一元的にし、ビジターセンターを窓口に観光協会がシステムとして事業化する。これまで少数で分け合ってきたものを“不特定多数”ではなく“特定多数”で共感し共鳴し醸成することを今も続けている。  
＜佐藤＞NHK の取材を受けた「互産互消」の動画を紹介。



2009年に富士山静岡空港が開港したことで掛川を取り巻く環境が変わった。札幌とは日に2便、福岡へは4便、沖縄、鹿児島、出雲とも空路が出来たことでローカルへの移動が容易になった。事務所から車で20分なので使いやすい。特に札幌とは緯度差9度・年間平均気温も9度差。各地の生活文化も異なり、食材が被らないのでいろんな交換ができる。食・物の交換、旅の“交歓”、生活の“交感”ができると考えている。各地で移住促進は行われているが、そうしたローカルとローカルを直接つなげる二拠点居住の推進が着目されている。今日は、静岡から北海道旭川へ移住し、ゲストハウスを経営している松本さんから



＜松本＞ 2年前まで中日新聞の記者だった。佐藤さんらとの縁ができ、東京を経由しなくても

ローカルとローカルが直接つながる「互産互消」の考え方に共感し今も交流が続いている。現在、旭川市で「旭川公園ゲストハウス」という宿を経営している。自然の厳しさと共に生きる地域の暮らしやにおいを、私が案内役になって暮らすようにじっくりと体験してもらっている。宿のメニューには、「近くの木こりと森で遊ぶ」「家具職人の工房見学」「凍れる季節の野菜の収穫や食体験」などがある。まずは人に会い、私も勉強させてもらっている。

きっかけは、記者としていろんな地域や人に会い話を聞いていく中で、自分もプレイヤー願望が強まった。豊かさと厳しさの表裏一体感や、ちょっと不便が良い、自然と調和した暮らし方など、いくつかの条件が浮かび、北海道を選んだ。ローカル資源としてスポットが当たってない可能性を今も旭川に感じている。事業を開始して一年半。まだまだこれから。本州では感じられないヒト・モノや、静岡の物をこちらで使うなどの交流を今後も続けていきたい。

＜佐藤＞ 空港がなかった頃に掛川に居た小松さんには、今、札幌で「互産互消」も手伝って頂いている。

＜小松＞ あの頃始めたサイクリングイベントなども今や当り前のコンテンツとなり、スローライフの交流も始まった。次のステージとして地域の価値ある暮らしや人の営みや思いを交換したり、それが経済に結び



ついたり、人の満足度につながる時代になった。長年の成果だと感

慨深い。

国交省でいろいろと造ってきたが、財産は多様と感じている。形の有るもの・無いもの。個人の物・公共の物。制度や法律も。形のない個人の物は、健康・友人・信用・チャレンジ精神・道徳など。それが地域に広がれば助け合い・コミュニティー・伝統行事など。「互産互消」は、個人と公共にまたがり形のない財産をたくさん作っている。

### 【質疑】

- 感想・質問（）内は居住地、○答え、（）内は回答者
- 当時は小松さんにスローライフを全てお任せしていた。それが今や学会などに発展し嬉しい。アフターコロナにこそスローライフは大切だと感じた。（掛川市）
- スローライフの始まりを懐かしく聞いた。基礎がしっかりしているので市民に根付いていると感じた。掛川がんばれ！（佐賀県小城市）
- 私も、初期に関わったので懐かしかった。あれからこれだけに発展した事に深く感じ入った。（東京都）
- 栗焼酎が今年は無いのは残念。（東京都）
- 私も当初から何度も掛川に足を運んでいる。大学のゼミ生をこれまで450人ほど連れて行きリピーターも多い。そうさせる魅力は、人の関係プレーだろう。生涯学習やスローライフを体系化させた榛村市長もすごいが、それに乗った市民が単にまちづく

りやプロモーションではなく、自分自身のこととして、これをすれば生活が楽しいんだ！という確信があるから、それが説得力になって人に伝わる。(東京会場から)

●掛川には昨年訪れた。発展的で憧れの町。行政の呼びかけに市民が賛同する様は、我が町と比べた時に、行政マンとしての力不足を感じた。(和歌山県紀の川市)

●生涯学習都市宣言から41年、生まれた子は41歳。当時榛村市長とサシでよく話を聞いた。行政中心だったことを市民が中心となり、今や外部とも交流している、この進化度がすごい。(埼玉県)

●当時は静岡に赴任して浜松から掛川を担当していたのに、何も知らなかった。何をしていたんだ？と反省。(東京都)

●急遽ホームページを検索したが掛川市のホームページはしょぼい。しかも、今回の発表者の熱や市民の魅力が全く伝わってこない。このギャップに驚いている。行政と市民の連係は出来ているのか？(東京都)

○当時もイベントは手弁当でやっていた。行政主導で始まった「スローライフ月間」

も、毎年11月には繰り返し、その間に受けとめる市民がいてNPOへと成長していった。行政が最後まで面倒を見るのは違うだろうと考えてしたこと。(小松)

○榛村市長から2、3人の市長交代があった事も背景にはあると思う。(野口)

○ポストコロナにスローライフは必要だとの意見が嬉しい。「スローライフ月間」を開催するにあたり、イベントにエントリーした80もの市民団体と面接しながら予算査定をした。およそ3日間。市民の気持ちに感動した事を思い出した。(川島)

.....  
「互産互消」についてもっと詳しいお話がある予定でしたが時間切れに。あらためてうかがう機会を設けたいものです。2002年に零れ落ちたスローライフの種が、市民の力で大きな樹に育っていると実感した夜でした。

(記録：事務局・長谷川八重、野口智子)

